

〈研究ノート〉

対人関係の困難観を生み出す「共生」の論理*

尾 添 侑 太**

現代社会は、メディア報道を中心として、人間関係の希薄化や、それに伴う社会全体の閉塞感がさまざまな問題と結びつけられて報じられる。地域共同体の解体、核家族化や単身化の進行、孤独死の増加など、たしかにその意味では、これまでに存在していた一部の関係が機能しなくなっている、または失われているということは間違いとは言えないだろう。たとえば、隣の住民がどのような人であるかを知らない、地域の活動には参加しないなどということは、経験的に理解しやすい。しかし、一方で、われわれは対人関係全体がけっして希薄化などしていないこともまた理解している。家族や恋人、友人とのかかわりは、現代においても重要な関係性であることに変わりはない。また、関係性の病の出現——たとえば、「友だち地獄」など——は、むしろ人間関係の濃密化が特定の領域において進行していることを裏付けている。本稿では、人間関係やコミュニケーションが実際に希薄化／閉塞化しているとみなすのではなく、何らかの介在によってそのような感覚が生み出されているという立場をとってみることにしたい。

1. 「対人関係不安」の高まり

はたして現代において対人関係は本当に「希薄化」しているのだろうか。図1は内閣府が発表している「国民生活に関する世論調査」をもとに、日常生活で充実感をえられる項目についての回答結果をグラフにしたものである。これによれば、「家族団らんの時」は調査結果が確認できる1974年から現在までおよそ40%～50%前後で推移し

ており、さらに全項目の中で優先順位が常に高い。現代家族の困難については、ひきこもり、虐待、育児放棄、家庭内暴力、親族間の殺人など、さまざまに問題提起されることが非常に多い。そのような文脈では、家族間のコミュニケーションの量の不足、質の改善が叫ばれることもある。しかし、それでも家族と過ごす時間というのは安定して日常生活において肯定的な要素となっていることがわかる。また、変化が顕著に見られるものは、「友人や知人と会合、雑談している時」に充実を感じる人の増加である。1975年で16.1%だったのが、2013年には43.9%まで上昇している。これは日常生活において、対人関係が家族（縁）と会社（縁）以外へも広がっていったこと、また「休養」と「趣味・スポーツ」と似た比率で上昇していることから、余暇活動への関心が高まったことなどが考えられる。また、この調査は複数項目を選択することができるので、趣味仲間やサークル活動など「趣味やスポーツ」が「友人・知人」と一緒におこなわれることも多いことを考えれば、友人や知人との関係づくりが一層その機会を増やし、日常生活での満足に大きく影響するようになったと考えられる。とりわけ、昨今では情報化やSNSなどのメディア技術の浸透によって、さらにより多くの関係を構築しやすくなったことも要因として挙げられるだろう。以上の2点をふまえると、現代は「家族との関係」と「友人との関係」が個人個人の充実した時間にとって重要な要素であるといえる。

一方、図2は同調査において反対に「不安を感じる内容」に対する調査結果をもとに作成している。回答項目の選択肢に「近隣や地域での人間関

*キーワード：対人関係観、共生、コミュニケーション規範

**関西学院大学大学院社会学研究科研究員

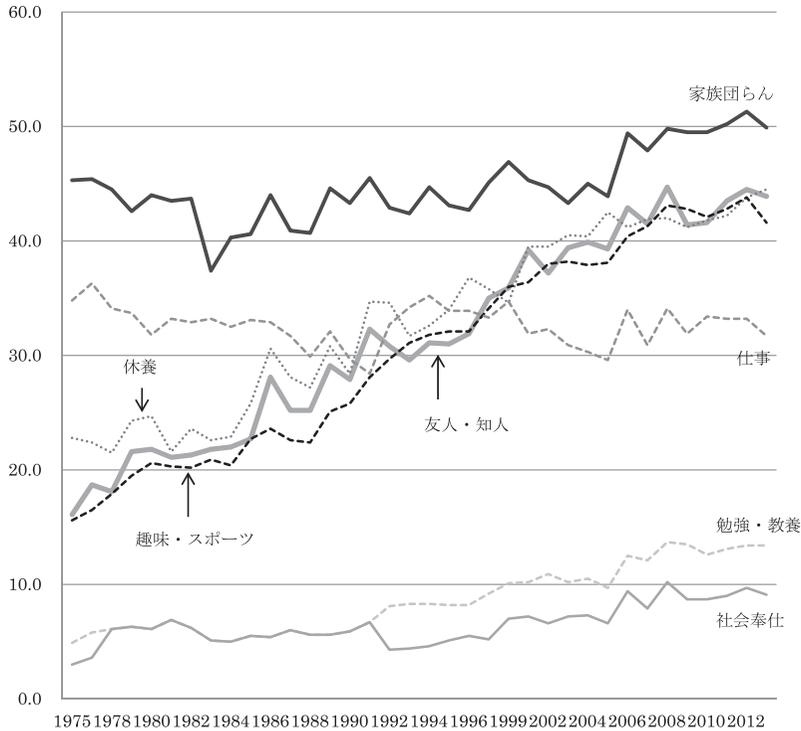


図1 「日常生活で充実を感じる時」(「国民生活に関する世論調査」より筆者作成)

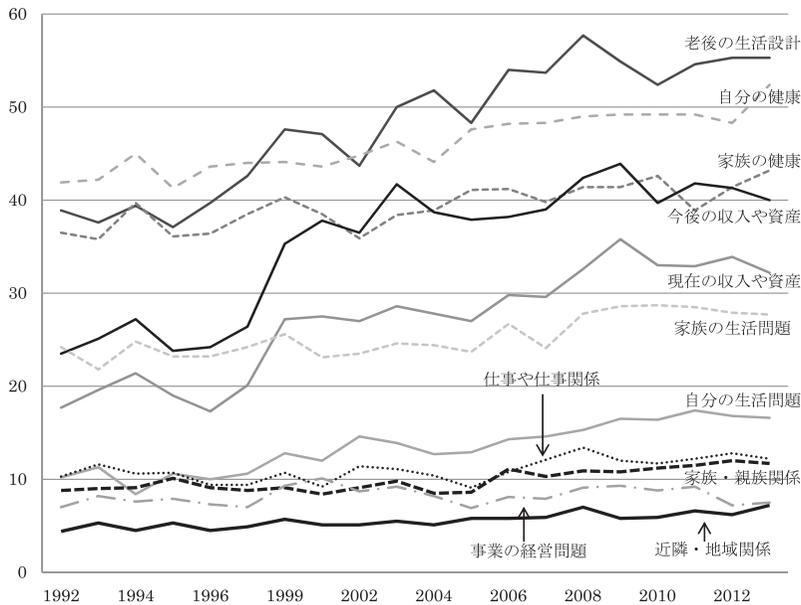


図2 「日常生活で不安を感じる内容」(「国民生活に関する世論調査」より筆者作成)

係「勤務先における仕事や人間関係」という項目が追加されたのは1992年からである。グラフからわかるように、基本的に人びとが日常生活を

営むうえで不安を感じることは、健康や資産・収入、相続に関するものが中心である。一方で、家族関係と仕事関係は10%前後、地域での関係は

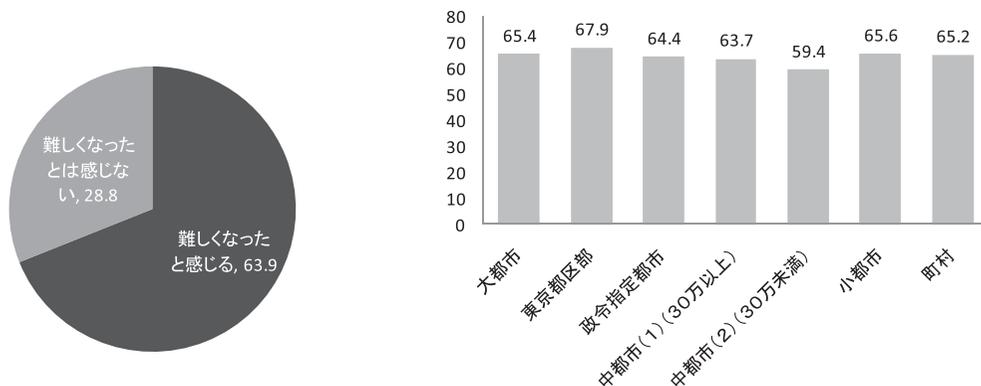


図3 「一般的な人間関係について」(「安全・安心に関する特別世論調査」より修正)

6%前後の間で推移して微増傾向にはあるが、関係的な要因が占める割合は相対的には低いものである¹⁾。つまり、2つの調査結果からわかることは、人びとは家族や友人などと過ごすことに充実感を抱いており、逆に対人関係不安が生活の中心にあるとは言い難いということである²⁾。この結果からみれば、現代において対人関係が単純に希薄化しているということは言えないことは明らかである。

しかしながら、2004年に同じく内閣府がおこなった「安全・安心に関する特別世論調査」においては、人びとの対人関係に対する違った認知がされていることがわかる。図3(左)は、一般的な人間関係に対して「難しくなった感じる」人と「難しくなったとは感じない」人の割合を表したものである。グラフから明らかなように、一般的な人間関係に対して「難しくなったと感じる」人の割合は63.9%であり、「難しくなったとは感じない」と答えた28.8%を大きく上回っている³⁾。また、図3(右)は、「難しくなったと感じる」と答えた人の居住地を都市規模別にグラフ化したものである。東京都区部と30万人未満の中都市の間にやや開きがあるが、都市の規模や都市/地方の違いによって認知に差が生じることはそれほ

どないことがわかる。つまり、対人関係に対する不安イメージは、都市部/地方に関係なく全体的に広がっているということである。

人びとが対人関係の困難化をイメージするのはなぜだろうか。要因として挙げられているのは、「モラル低下」「地域におけるつながりの希薄化」「人間関係を作る力の低下」「核家族化」「親子関係の希薄化」などである。また、安全な生活を脅かすような懸念事項として増加しているものは「情緒不安定な人、キレル人」「児童虐待・家庭内暴力」「うつ病」「不登校・ひきこもり」「ストーカー」「路上生活者」が挙げられている。これらの懸念事項は、特徴的な事例として注目されて、ある種の社会問題としてメディアに取り上げられているものが多い。たとえば、自分は家族問題を抱えておらず、むしろ日常の中で家族と過ごす時間に満足を感じている人であっても、メディアの中で報じられる日本のどこかの「家族」に起きている問題を通して、「親子関係の希薄化」を感じる人が多いことが推測される。

このような対人関係に対する認知のねじれは、「体感治安」にまつわる認知のねじれ構造と似たようなことがいえる。犯罪心理学者の浜井浩一(2006)は、犯罪統計データの分析を行い、凶悪

- 1) 「家族・親族間の人間関係」という項目は、1981年から設定されている。1980年以前の選択肢では、「人間関係」を示す項目自体が設定されていない。
- 2) しかしながら、たとえば「老後の生活設計」や「今後の収入」「自分の健康」といった項目が、人間関係の悩みと完全に分離しているとは言えないことは考慮しなければならない。「身寄りがいない」といった「家族・親族関係の不安」を背景にして「老後の生活設計の不安」へと繋がっていくことは容易に想定できる。
- 3) 「難しくなったと感じる」「どちらかと言えば難しくなった」の小計と、「あまり難しくなったとは感じない」「難しくなったとは感じない」の小計の割合。

犯罪や少年犯罪が実際には減少しているにもかかわらず、人びとが「治安悪化」を感じる傾向が1990年代以降増加していることをあきらかにしている。そもそも、日本の治安に関する不安は、「具体的な心理的恐怖を感じる身近な不安というよりは、犯罪が大きな社会問題だと憂慮する concern about crime に近いもの」であり、「マスコミや警察が、最近の犯罪の凶悪化、それに対応することの困難さ…を喧伝することが、人びとの安全感を低下させ、犯罪不安を煽ることになる」とされる(浜井 2006: 51)。つまり、自分の身の回りで治安の悪化を直接感じさせる経験——たとえば、自分や知り合いが夜道で暴漢に襲われるなど——があるわけではない多くの人びとが、メディア報道の影響によって犯罪の「凶悪化」や犯罪者の遍在を「まさに自分の身の回りで起きている」かのような錯覚するということである。

特殊な事件は社会的な変容の一つの象徴であり、その背景にはモラルの低下など社会の質的な変化によって、社会全体で暴力がコントロールできなくなってきたという主張がなされるのである。この主張は、いつ誰が暴力の犠牲になるかわからないということを暗示し、すべての人がこの問題を自分のこととして考え、取り組む必要があるというメッセージを含んでいる。(浜井 2006: 58-9)

しかしながら、問題は、犯罪不安がメディアを中心とした「煽り」によるものであり、イメージに過ぎない——実際、データでみれば凶悪犯罪は減少傾向にある——としても、「いつどこで自分が犯罪に巻き込まれるかわからない」という感覚が一度定着してしまうと、その感覚は簡単には拭きされなくなってしまうということだ。自分の周りには起きていないが、日本のどこかで起きているという感覚の定着は、犯罪不安にとどまるものではない。その考え方は、現代の対人関係の認識の仕方にも共通する。では、なぜ認識にねじれが生じながら、現代の対人関係は困難化していると

感じられるのだろうか。次節では、現在の対人関係規範として「共生」の在り方を取り上げ、その「共生」がわれわれの対人関係の認識とどのように関連しているかを確認する。

2. 「共生」の論理

よくわからない人びと、自分の安全な生活を脅かすような他者の存在が増えているという感覚は、どのような形で対処することができるのだろうか。そのような社会において多くの人びとを方向づける力を、本稿では「共生」と呼ぶことにしたい。もともと「共棲」という原義では、異種の生物が相互作用状態において生存することを指す。それが人と人との関係性に拡張されたものが「共生」である。たとえば、「多文化共生」の文脈においては、日常の外部からやってくる「異邦人」や「異文化」に対する受容のうえに、共に生きていくことが目指される⁴⁾。また「共生社会」というときは、男性に対する女性、健常者に対する障がい者、若者に対する高齢者など、主に「社会的弱者」として排除されてきた人びとの権利をすくいあげ、共に生きていくことが目指される。つまり、「共生」とは今まで出会うことのなかった人や一緒にいるのが難しかった人と、新たに関係を作り出していこうとするものであるといえる。そして、「多文化共生」や「異文化理解」、マジョリティに対するマイノリティといったような「ウチ」に対する「ソト」に関する議論を大きく飛び越え、今や広く一般的な関係に対しても「共生」の理念は浸透している。

(1) さわらぬ「自己」に崇りなし—他者尊重の高まり

塩原良和は異文化理解における対話の重要性を指摘しつつも、実際に異文化を理解しなければならない状況において、対話が阻害されることを問題とする。

異文化を理解しようとする人々が他者の文化を

4) 総務省は「『多文化共生』とは、国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」、多文化共生センターは「『多文化共生』とは…さまざまな生き方が共に存在する社会であり、自分が自分らしく生きる社会」とそれぞれ定義している。

「尊重」するあまり、他者との対話を避けてしまうという逆説…たとえ真剣にマイノリティの話を聞こうと思っていたとしても、私たちはしばしばそれを「聞いたつもり」になって、批判をしないことで自分の文化や価値観を守ろうとしてしまうのだ。(塩原 2012: 64)

「共生」の理念、どのような文化であってもどのような人であっても共に生きていこうという考え方は、それ自体が否定されるものではない。しかし、実際「異なる」人どうしが共に生きていくということはそれほど容易に達成できるものではない。相手を理解しようとする志向が、はからずも相手との距離化や断絶を結果的に生じさせてしまうこともある。共生をめざそうとした結果、区別化が起きてしまうのだ。このことを、より一般的な対人関係に対応させてみよう。

現代的な対人関係の特徴としては、「やさしい関係」が挙げられる(森 2000、土井 2003、2008)。森真一は、精神科医の大平健による「治療としてのやさしさ(1970年代)」と「予防としてのやさしさ(1980年代)」を整理した上で、傷つけることがもっともタブー視される時代へと移行していることを示し、「人格崇拜」規範の高度化/厳格化にその原因を見いだす(森 2000: 103-4)。個人は最も尊重されるべき自律した存在であり、どのような他者であってもそれを否定するような発言や行いは決してしてはいけないという社会規範が、お互いをどこまでも気遣いあう「やさしい関係」という対人技術を編み出したといえる。

治療としての「やさしさ」から予防としての“やさしさ”への移行とは、いったんつけてしまった傷を相互に修復しあうことができた時代から、傷つけることがもっとも非難すべきタブーであり、傷つけることを全力で回避することを規範・義務とする時代への移行である。(森 2000: 103)

「コミュニケーション」の重要性は1970年代以降、高まり続けているが、「やさしさ」から“やさしさ”の移行における「話す」「語る」ことか

ら「黙る」という行為変化は、むしろコミュニケーション的な要因が縮小していることを表している。言い換えれば、言語的な部分ではなく「気遣い」「察し」などの非言語的な側面がコミュニケーションに求められはじめたということである。それぞれが固有で特有な存在ということが疑いなく引き受けられる現代において、仮に住んでいる国や地域、国籍、年齢、職業など自分にとっての外在的な要素が同じであっても、出会う一人ひとりとは自分とは異なる他者——「聖なる自己」(森 2000)——である。自分の生活世界の外部から到来する他者よりも先に、自分の非常に身近な世界にいる多数の他者とのかかわりがそこには存在する。一見は、仲間内に見えても、そこには経済モデルのような管理・戦術的な関係が築かれており、その疲弊によって自分が関係を持っている以外の他者はすべて認識の外に置かれてしまう。つまり、認識されないということは、「他者」でもなく、透明な存在になってしまうのだ。中島梓(1995)は、当時のオタクやBL小説愛好家を「コミュニケーション不全症候群」と呼称したが、その要因を「他者の不在」に求めた。「やさしい関係」もまた、内部に対する参加度がきわめて高いため、プライベートな関係は親密度を確認しあう緊張関係に陥り、さらに外部の人びとは自分たちとはまったく関係のない世界の住人のように感じられてしまうのである。公私関係の緊張ではなく、私的領域の緊張の高まりと公的領域の消失が、現代の「他者の不在」の一因であると考えられる。

(2) 「カテゴリー」化による理解—隠された排除

塩原は、現代の「自己」というのは、「多重/多層/多面的」なものとして形成されていくなかで「自分とは何者か」が決定されていく過程として捉えるべきだと主張するが、実際は限定された形で理解されてしまうという困難を挙げている。

私たちは自分が多様な差異を抱えた存在であることを他人に理解してもらえないことがある。それどころか、「お前は○○だという者だ」と周囲の人から決めつけられ、それ以外の自分の側面を認めてもらえなくなることもある。(塩原 2012: 57)

多くの人びとにとって、「理解できない人」の存在は脅威となりうる。自分の理解の範疇を軽々乗り越えてくる彼／彼女らを理解するには、理解するための枠組み、つまり解釈の手助けがなければならぬ。それが、現代の「医療化」の一因であるといえるだろう。

たとえば、「アスペルガー症候群」の特徴をもった生徒は、「落ち着きのない子」のように、もちろんその名称がなされる以前にも存在していた。このような病状の「命名」は、「よくわからない」人びとをわからないままにしておくのではなく、カテゴリ化することによって表面上の理解を取得するプロセスである。つまり、よく知っていなくても「アスペルガーだ」という断りで、その人を端的に理解できる仕組みを作り出すことといえるだろう。

また、ここ数年「新型うつ病」が問題となっているのも、「うつ病」それ自体の問題というよりも、その「よくわからなさ」、つまり他者からながめた場合の受容の困難さにあるといえる。「新型うつ病」が実際に問題となるのは、会社や企業を中心である。これまでのうつ病というのは、生活全体の行動レベルが著しく低下し、働くことのみでなく日常生活のあらゆる場面からの撤退が余儀なくされる。当然、うつ病に限らず身体的な問題が生じることは、会社や企業にとってはリスクとなりうる。しかし、新型うつ病で問題となるのは、会社には来られないにもかかわらず、友人との旅行や会食は全く問題なく楽しめるなどの点にあり、また休養中に旅行に行くことを目的とした休暇願が堂々と提出されることにある。これは局所的なうつの発生という症状の現れ方の変化に伴って、それを理解する枠組みの不足が生じるために「問題化」されるということである。「新型うつ病」の患者は、職場の上司や同僚から「怠け」「甘え」だと非難される場合が多く、「よくわからない」人という位置づけがなされがちである。

このようにして現代では、合理的理由もなく急に激昂する客を「クレーマー」と呼び、道を尋ねた社員が「不審者」となる。われわれは、身近にいる他者の中から「変わった人」や「よくわからない人」を「理解できない」他者として顕在化させ、何らかの区分に依拠して理解しようとす

る。つまり、他者を理解しようとするときの出発点は、つねに「その人は何者であるか」ということである。

ここでの問題は、限定化された理解の不足というよりも、表向き「共生」が達成されているように見えて、実際には暴力的に誰かを排除して、そこに断絶が用意されることにある。

私たちは自らの想像力を他者との共生を目指す方向に常に働かせるとは限らない。存在論的不安に囚われた人々は、他者を自らの不安の元凶として攻撃しがちである。それは、どこかに不安の原因を見出して安心したいだけの、根拠のない非難や攻撃になる。そこでは他者と共生しようとする想像力ではなく、他者を自己の不安の源泉だと錯誤する被害妄想が働いてしまうのだ。(塩原 2012: 17)

また、薄井は相互作用場面において、通常ならば非難の対象となるような行為がカテゴリーによって対象から外される事例を挙げる。例えば、公共空間における「子ども」の取り扱いである。

社会的カテゴリという緩衝装置を介在させた判断では、彼ら「子供」には不作法に対する責任能力がまだないとされるからである。「老人」や「スティグマを貼られた人」の不作法が寛大に扱われるケースも、ここに含まれると考えていいだろう。(薄井 1991: 167-168)

子どもが電車の中を走り回っていたり、大きな声を出したり、隣の乗客に話しかけたりしても、ある程度周囲がそれに目をつむるということは誰しも想像できるだろう。しかし、このような子どもを見守るやさしいまなざしは、ある意味で子どもを社会成員としてみなさない暴力性も帯びている。

被害者が彼らの不作法を侵害と感ぜないのは、対人儀礼上、彼らを対等な「人」とはみなしていないからである。寛大さとリンクした「人でない者」扱い、これが彼らの不作法の侵害を“中和”している。(薄井 1991: 168)

現代では、これまでの理解の枠組みでは単純に理解することのできない「よくわからない」人びとの存在が浮き彫りになることが非常に多くなってきている。また、そのような人びとがそれでもいることのできる居場所が社会空間から排除されつつある⁵⁾。それは身近な関係の「内部」に対する監視の強化、厳選が現代において高まっているからだろう。また、一般用語として「KY」や「コミュ障」「ぼっち」などの準カテゴリーも出現しだしていることを考えれば、排除と同化をめぐる対人関係が緊迫化していることがわかるだろう。

しかし、現代では他者からカテゴリーが押しつけられるばかりでなく、自らあるカテゴリーを呼称することがある。顕著な例として、「コミュ障」という若者用語が挙げられる。「コミュ障」とはもともと他者によってラベリングされるネガティブな言葉である。他者からの承認が得られるかどうか親密な関係性では決定的に重要になる現代では、他者から「コミュ障」と名付けられることは絶対に避けなければならない。しかし、若者の使われ方は先にそれを自称して、「キャラ」を駆使するように一面的な自己をわかりやすく呈示する。むしろ、それは他者が自分の存在にとっての不安の元凶ではあるが、自分の存立にとって必要な他者を攻撃して排除しようとするのではなく、先に防御をとることの方が安全であると感じられるからだろう。つまり、「コミュ障」という自己の間接呈示は、自分が対人関係において求められるもの——空気を読んだり、相手を尊重したり、場を乱さないことなど——を侵害するかもしれない、そしてそれ以上にその侵害によって承認を得られない——または傷つけられる——かもしれないということへの「防御態勢」である意味合いが強い。自らを劣位に立たせることで、自尊感情をなんとか守ろうとしながら、間接的な承認を得ようとする。現代的な「生きづらさ」は、日常の他者との関係において、一方で「普通であること」「一緒であること」をめぐる同化の圧力、他方で「普通でないこと」「苦しいこと」を認めてもらうという排除への恐れの間をせめぎあいのように感

じられる。

3. おわりに

われわれは認識のうへでは対人関係が困難化しているとたしかに感じている。そして、それはメディアが問題として報じる影響を強く受けて構築されている。とりわけ、対人関係の困難化に関していえば、特徴的に表れるのは何かしらの問題を起こした当事者が、一見すると「普通」な存在ということが強調される点である。明るく人気者の生徒、地味な主婦、真面目な会社員、仲睦まじい親子など、どこにでもいるような「普通」の人びとが、突如として事件の当事者となることがクローズアップされるのだ。そして、犯罪にまではいたらずとも、たとえば「ご近所トラブル」やクレーマー、モンスター化した人びとの存在を取り上げることにより、現代ではあらゆるところにトラブルを起こす可能性のある「普通」の人の存在や、常に自分の身の回りにおいてもそのような存在が遍在しているのではないかという感覚が共有されていく。

共生の問題は、目の前に実際に対面していない他者についても、一定に理解を手助けするような枠組みを提示することで、実際には知らない他者についても「知っている」という感覚を人びとに与えていくことになる。もちろん、「共生」のあり方がそのような関係性を築くことを目的としているというわけではない。これまでではわかりあえなかった、よく知らなかった相手ともわかりあって共に生きていくための技術が広く伝達されていくなかで意図せず生み出されてしまった帰結である。

本稿で問題とする共生がもたらす帰結は三点ある。第一に「共生」は誰かと「その場に居合わせている」という事態ではなく、誰かと「一緒にいることができる」ための認識の修正が出発点にあること。第二に「共生」は「相手は何者であるか」が重要であるため、何者かを判断できない人に対して排除的になるということ。第三に自己にも他者にも厳しい目を向ける不寛容な社会をより

5) 貴戸 (2011) は、「ニッチ (すきま)」の創出実践として、浦河べてるの家などを挙げている。

いっそう促進させてしまうこと。

「共生」は、さまざまな人びとが多様な在り方で結びついていくことを目指すものである。しかし、実際には人と人の断絶をもたらす帰結をも含んでしまうことになる。そこで、「共生」とは別の観点を導入したい。それが「共在」である。共在の特徴は、「人と人がただその場に居合せている」ということを出発点にすることである。ただし、このことが共生の考え方に対して優位であるということを言いたいわけではない。それは多様性を多様性のまま、複雑性を縮減せず、相手が何者なのかを知らないままにしておく試みである。共在はあくまで状況であって、居合わせる人と人との関係が「良い／悪い」といったような価値とはいったんは区別される。しかし、だからこそ何者でもない人と何者でもない人がその場に居合せているさまざまな状況を記述することによって、対人関係のもつ多様性を抽出することが可能になる。

なぜなら、本来、人と人との関係性が「よい関係性」だとわかるのは、常に関係を振り返ることではしか決めることはできないはずである。つまり、関係を時間軸の中で考えるとき、その関係の価値は、現在に立ってそこから過去を省みることにしかない。しかし、共生の在り方は関係を常に未来の中にみようとする。そのため、現在の関係性はいつも最初から問題を孕んだもので修正・更新の必要性に迫られている。言い換えれば「共生」とは、ある文脈において望ましいまたは達成されるべき関係モデルを先に想定し、そのような関係にたどりつくために自己や関係を矯正または修正、更新していくような関係規範と考えられる。現在の対人関係が閉塞していると感じられるのは、実際に対人関係が閉塞化しているからではなく、われわれの対人関係を捉える認識の仕方が狭窄しているためである。そのため、人と人のかかわりを生きづらさの対象としてみ直すのではなく、その際に動員される規範とそれを先取りする「仕組み」として捉え直し、関係を規範によって矯正・更新する対人関係観－共生－ではない共

にいることの可能性を描くことが何よりも重要となる。

参考文献

- 土井隆義, 2003, 『〈非行少年〉の消滅－個性神話と少年犯罪－』 信山社.
- , 2008, 『友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル』 筑摩書房.
- Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity. (= 1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?－モダニティの帰結－』 而立書房.)
- , 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Cambridge: Polity. (= 1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容 近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム－』 而立書房.)
- 浜井浩一・芹沢一也, 2006, 『犯罪不安社会 誰もが「不審者」?』 光文社新書.
- 長谷正人・奥村隆編, 2009, 『コミュニケーションの社会学』 有斐閣アルマ.
- 貴戸理恵, 2011, 『「コミュニケーション能力がない」と悩まえて 生きづらさを考える』 岩波ブックレット.
- 三上剛史, 2013, 『社会学的ディアボリズム－リスク社会の個人－』 学文社.
- 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻 感情マネジメント社会の現実』 講談社選書メチエ.
- 中井孝章, 2008, 『学校身体管理技術 規律訓練から環境管理へ』 春風社.
- 中島梓, 1995, 『コミュニケーション不全症候群』 筑摩書房.
- 奥村隆, 1998, 『他者という技法 コミュニケーションの社会学』 日本評論社.
- 斎藤環, 2011, 『「社会的うつ病」の治し方 人間関係をどう見直すか』 新潮選書.
- 塩原良和, 2012, 「共に生きる－多民族・多文化社会における対話」『現代社会学ライブラリー 3』 弘文堂.
- 薄井明, 1991, 「〈市民的自己〉をめぐる攻防－ゴフマンの無礼・不法法論の展開」『ゴフマン世界の再構成 共在の技法と秩序』 世界思想社: 157-183.

Mechanisms that Produce Difficulties for Interpersonal Relationships from “Symbiosis” to “Co-existence”

ABSTRACT

We are aware that a sense of satisfaction is gained from forming close interpersonal relationships on our own. Nevertheless, we recognize modern interpersonal relationships are difficult in general. This paper problematizes the issue of recognition in interpersonal relationships in modern society by focusing on eliciting the logic of “symbiosis”.

In the context of “multicultural symbiosis” and “intercultural understanding”, “symbiosis” is described as ideal or emotional. However, the only portions extracted are “understand one another” and “let’s live together in harmony”. This paper presents three points which are consequences symbiosis. First, “symbiosis” is a starting point for modifying the perception that “it is possible to share something” with someone. Second, symbiosis” is an important mechanism in determining the identity of others, thus allowing the exclusion of those who cannot be identified. “Symbiosis” would promote an even more intolerant society to direct scrutiny for both oneself and others.

In other words, “symbiosis” is considered a mechanism that fixes norms in relationships, or corrects the relationship between self and others in order to establish in advance the relationship to be achieved within a certain context. “Symbiosis” also makes it possible to arrive at such a relationship, and to renew it. Moreover, this paper observes that the “possibility you are together” is not an example of “symbiosis”.

Key Words: recognition in interpersonal relationships, symbiosis, communication norms